

## Japan National Young Water Professionals Newsletter

第6号

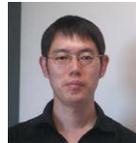
発行日 2013年 3月 17日

## The 4th IWA Asia-Pacific Young Water Professionals Conference



## 開催委員長からご挨拶

北海道大学大学院工学研究院  
Japan-YWP 副代表  
佐藤 久



**2**012年12月7日から10日の4日間、日本科学未来館において「第4回IWAアジア太平洋若手水専門家地域会議 (APYWP2012)」が開催されました。これはJapan-YWPが主催する最初の国際会議であり、Japan-YWP 幹事から選出された7名で学会を準備、運営しました。APYWPの日本担当幹事であったことから、私が実行委員長を仰せつかりました。会議はJapan-YWPメンバーの皆様にも多数ご参加いただいた結果、参加人数233名という大規模な学会となりました。24の国と地域からの参加があり、アジア太平洋地域という枠を超えた会議となりました。このように会議が成功裏に終わったのも、6人の運営委員の皆様のおかげです。この場を借りて御礼申し上げます。

これまでAPYWP会議は、第1回が2008年12月に韓国の光州で、第2回が2009年11月に北京で、第3回が2010年11月にシンガポールで開催されました。そして第5回は2014年に台湾で開催される予定です。第1回APYWPでは産声を上げたばかりの会議であったためなかなか発表者が集まらず、発表者の約8割が開催国からの参加でした。その後、第2回、第3回と回を重ねるごとに参加者は増えていき、体裁も学会らしくなりました。一方、本会議はその名の通り、若手技術者のための会議ですが、年々参加者の年齢も上がり、フランクな雰囲気が出なくなっていると感じていました。APYWPの立ち上げから参加している私としては本会議の最重要目的である、「アジア太平洋地域の若手水専門家がネットワークを構築する」ということを、APYWP2012では初心に戻って達成したいと考えておりました。実行委員の皆様がこの方針をお伝えしたところ、ご快諾いただきました。その結果、APYWP2012は参加費6000円、浴衣を着て温泉で懇親会、という、過去に類を見ない国際会議となりました。

研究発表やワークショップも若手主体の学会ならではのものでした。いくつかの研究発表は放射性物質除去、温室効果ガス発生抑制などの新たな水技術開発への挑戦的な内容でした。3件のワークショップでは、国際協力・国際水ビジネスに関して、水環境教育に関して、水中の病原微生物に関して議論が展開されました。

本会議を通じて日本の学生や若手技術者が世界各国の若手水専門家と深く議論し、ネットワークを構築できたものと自負しております。参加していただいた方には重ねて御礼申し上げます。

## 目次

## 1 APYWP 特集

- ・開催委員長挨拶 / 佐藤 久
- ・参加報告 / Dr. Tao Li
- ・次回 APYWP 開催案内

/ Dr. Hsin-hsin Tung

## 2 IWA World Water Congress &amp; Exhibition 学会参加報告

北海道大学大学院 栗田 宗大

## 3 Japan-YWP ロゴマーク大発表

TEC インターナショナル 中園 隼人

## 4 【近況・活動紹介】

- 私の研究紹介 / 小林 彩乃
- IAHR 若手の会紹介 / 銭 潮潮
- 関西水関係若手の会紹介 / 杉野 学

## 5 【J-YWP イベント報告】

- イブニングセミナー開催報告 / 岸田 直裕
- 水道技術国際シンポジウム YWP セッション開催報告 / 松原 康一

## 6 【手紙 ～拝啓若手の君へ～】

- 北海道大学環境ナノ・バイオ工学研究センター 渡辺 義公

## 7 【私の一日スケジュール】

- 北海道大学・フランス海洋開発研究所 / 三浦 尚之

## 8 【Water Resources】

- "みず"に関するおすすめの情報  
古川 隼士、西迫里恵、柿沼建至

## 9 【Japan YWP 運営からのお知らせ】

- ML 登録アドレスの整理について
- 今後の予定
- 入会方法とお問い合わせ先
- 編集後記

# Japan National Young Water Professionals Newsletter

## 第 6 号

### 参加報告



The Director of IWA China Regional Office.  
Tao Li, PhD

To strengthen the network and visibility of the young generation in water sectors in Asia Pacific Region, the Asia-Pacific Regional Young Water Professionals (APYWP) conference has become an unique platform for the leaders of the future in the region. The 4th APYWP has been successfully held by Japan National YWP Committee in Tokyo, Japan on Dec 2012. I has been informed that the delegates is over 200, and half of them are from overseas. Regarding the wonderful representatives, I believe it should be the biggest and the most impressive APYWP conference. The conference was well organized. Personally, I really enjoyed all the activities, and highly appreciated the fruitful presentations, discussions and technical tours. On behalf of IWA and all of the conference delegates, I would like to give my sincere thanks to the organizer, IWA Japan-YWP committee for your excellent job, and also to all the sponsors for your kind support.

As all we know, the International Water Association is a people's organization, especially our members and partners who did tremendous efforts for the association. The Young Water Professionals are not only the future leaders but the future of the association. We hope more young generations to be active in IWA and also hope the IWA YWP programme will provide more opportunities for networking, recognition and career development for the leaders of the future.

Look forward to meeting old friends and making new friends in the 5th APYWP in Taipei 2014.



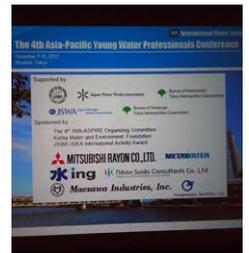
ワークショップの様子



懇親会@大江戸温泉の様子



ポスターセッションの様子



スポンサーの皆様

### 次回APYWP開催のご案内

The National Taiwan University and the Chinese Taipei Water Works Association will host the 5th Asia-Pacific Young Water Professionals (APYWP) Conference in Dec 7-9, 2014, Taipei, Taiwan. APYWP is a great network for young professionals working in the Asia-Pacific region. The 5th APYWP conference will follow the tradition of a series of successful APYWP conferences. In addition, this year's conference will be held jointly with the 7th International Conference for Young Water Professionals. This event will bring together young water professional from all facets of the international water sector. This conference will provide an excellent opportunity for YWPs working in utility or in research to present their work and meet with peers from all over the world.

Taipei is a vibrant city. Combined with traditional and cosmopolitan styles, Taipei is a great place to visit. We sincerely welcome your participation in this joint conference and look forward to meeting you in Taipei.



Shang-Lien Lo (Conference Chair)  
National Taiwan University



Hsin-hsin Tung (Organizing Committee Chair)  
National Taiwan University

## IWA World Water Congress &amp; Exhibition 学会参加報告

北海道大学大学院工学院  
栗田 宗大

この度は Japan Young Water Professional による国際会議参加費助成をいただき、誠にありがとうございました。おかげさまで、2012年9月16日から21日に、韓国の釜山にて開催された、IWA World Water Congress & Exhibition に参加でき、自分の研究をさらに発展するための多くの貴重な情報を得ることができました。

会議に参加した報告をさせていただきます。本会議では、水処理や水マネジメントなど水に関わる幅広いテーマの下で、250件を超える口頭発表と350件のポスター発表が行われました。会議当日に台風16号が通過するなどのアクシデントもありましたが、大きな影響もなく会場となったコンベンションセンター BEXCO には90カ国から、2200名もの参加者が集まり、連日活発な議論が行われていました。また、会場の内外で韓国の文化や食を紹介するイベントも同時に行われていたため、所々でお祭りが催されているような不思議な雰囲気の会議となりました。

私は浸漬型 MBR 槽内に粒状担体を投入し、膜ファウリングの抑制と曝気量削減効果を調査した内容について、ポスター発表を行いました。類似したテーマのポスターが近くに集まっていたこともあり、他の発表者の方とも研究トピックや実験方法について意見を交換することができました。今回が初めての国際学会への参加で、終止緊張してしまいましたが、疑問や興味に対して発表者同士で積極的に質問や議論を行う雰囲気に後押しされ、有意義な発表を行うことができました。

また、学会と併設して韓国企業のブースを中心とした展示会も行われていました。会場には多くの報道機関も取材に訪れ、韓国国内での水ビジネスに対する関心の高さを肌で感じました。



近代的な外観の会場



会場で行われていた催し



開会式の様子

## J-YWP ロゴマーク大発表！！

TEC インターナショナル株式会社  
Japan-YWP 広報委員  
中園 隼人

昨年12月、第4回 IWA アジア太平洋若手専門家地域会議の Opening で春日代表からご発表があり、ご存知の方もいらっしゃると思いますが、Japan-YWP ロゴマークが決定致しましたので、発表致します！！

Japan-YWP が設立されて3年弱が経ち、多くの水関連の若手が集い、ネットワークを広げて参りました。今後益々、Japan-YWP 活動が推進されると同時に、会員の皆さんに親しみをもって、活動に参加して頂けたらと思い、今回、ロゴマークを制定することとなりました。

最初に、Japan-YWP 会員の皆さんから、各種イベントでロゴマークのアイデアを頂き、ロゴマークデザインのキーワードとして、“水”、“若手”、“産官学連携”、“日本”の4つに絞り込みました。そのキーワードを下に、デザイン会社とロゴマーク候補を作成し、ロゴマーク候補6案をもって、電子メールによる記名投票を行いました。

Japan-YWP 会員の多くの方からご投票頂き、Japan-YWP ロゴマークは下記の通り、“水のゆらめき”と“日の丸”をイメージしたロゴマーク（通称 Rising Sun）となりました。因みに、投票頂いた方の半数以上が、このロゴマークに票を入れており、ダントツの人気でした！！

今後、Japan-YWP 発行印刷物や各種イベントにて、この新しいロゴマークを使用して参ります！！

惜しくも敗れた  
その他の候補

## 近況・活動報告 『私の研究紹介』

北海道大学大学院工学院  
環境創生工学専攻 博士課程 2年  
小林 彩乃



**J**apan-YWPの皆様、はじめまして。北海道大学大学院 工学院で学んでいる小林彩乃と申します。私は、高等専門学校（環境都市工学科）、高等専門学校専攻科（環境工学専攻）を経て北海道大学大学院に進学しました。

高等専門学校から水環境を専門に研究をしてきましたが、大学院に進学後はそれまで扱ってこなかった分子生物学の専門的な知識が必要となりました。すでに学んでいる同級生たちには簡単なことも、私には理解ができないところからのスタートで、はじめは分子生物学を基礎から勉強する日々でした。

そんな私も気づけば博士課程2年生で、分子生物学に対する研究を後輩の学生に指導する立場となりました。しかし、まだまだ分からないことや課題は山積みで、毎日必死で研究生活を送っています。

私の博士論文の研究では、病原微生物の許容感染リスクに基づく水質基準値設定方法の検討を行っています。大腸菌や大腸菌群数などの糞便汚染指標は、環境水や飲料水の水質評価に従来から広く用いられており、日本のみならず、様々な国において衛生事情の改善に大きく寄与してきました。しかしながら、糞便汚染指標細菌と病原微生物の環境中における挙動が異なるため、必ずしも従来の糞便汚染指標濃度と病原微生物の濃度が相関を示さない場合があり、従来の糞便汚染指標のみにより病原微生物濃度の制御を適切に行うことは困難であると考えられています。また、従来の糞便汚染指標の水質基準値は病原微生物の許容感染リスクに基づき理論的に設定されたものではありません。そこで、水中の病原微生物濃度の変動を考慮して、論理的に糞便汚染指標の水質基準値を設定する方法論の確立を最終目標としました。

さて本研究では、水中の指標微生物と病原微生物濃度の変動を把握するため、月に2回の河川水サンプリングを行っています。夏の北海道は非常に快適な一方で、真冬の北海道でのサンプリングは非常に過酷です。外気温-10℃、高欄よりも高く積もった雪、凍ったpH・ECメーター・・・私一人ではとても研究を続けることはできませんでしたが、研究室の学生達の多大なる協力によって、およそ1年間の調査を行ってきました。今後はサンプリングを継続すると共に、感染許容リスクに基づいた河川水中の病原微生物の許容濃度と、実際のサンプリングデータより求められた指標微生物及び病原微生物の濃度分布から水質基準値の検討をしていきます。今度は、確率・統計の勉強からのスタートです。この学問は私にとって非常に不得意な分野で、ことあるごとに躓きながら進んでいます。それでも、10年、20年後になるかもしれませんが、この研究が人々の快適で健やかな生活に役立ってくれると信じて、努力していきたいと思えます。



サンプリングに協力してくれている学生達  
(左側；小澤くん、右側；平泉さん)



夏のサンプリング地点



冬のサンプリング地点

## 近況・活動報告 『水文水資源学会 若手の会の紹介』

中央大学大学院  
銭 潮潮

**水**に関する知の大連合を若手から形成しましょう。

今月、タイ王国の巨大な総合治水入札の中間審査結果が世界に公表しました。このような巨大プロジェクトの熾烈な競争に勝ち残れるのはまぎれもなく学術をコアとする「総合力」であります。学術の総合力を最大限発揮できるようにするのは横断的な「大連合」が不可欠と考えられます。私はこれまでに水文・水資源学会若手会のコアメンバーの1人として、水工、水文、水資源工学の分野のみならず、理学や農学の若手とも連携して合宿や勉強会などの若手会活動を行っております。今後とも微力ながら、環境、衛生工学を含め、更に多くの皆さんと共に水に関する知の大連合の実現と深化に貢献できればと祈望しております。



2011年8月若手合宿@京都大学



2012年9月若手合宿@広島



2012年11月若手勉強会@中央大学

## 近況・活動報告 『関西の水関係若手ネットワーク会』

株式会社 総合水研究所

杉野 学



**昨**年、関西の水関係若手ネットワーク「通称：ウォーター・ループの会」を立ち上げました。関西と東京のチャンスに関するポテンシャルの差は以前から感じており、Japan-YWP のイベントやその他の学会の開催の状況を見ても、やはり東京が中心で、歯がゆさを感じておりました。しかし、関西には実は水関連企業が多く、また琵琶湖淀川水系という特殊な水環境があり、関西のポテンシャルも捨てたものじゃない！と、思い切って立ち上げをしました。運営の形態は、年 4 回（3 月、6 月、9 月、12 月）、大阪梅田周辺での開催を予定しています。幹事は毎回交代制で、幹事の人や場所や日時（平日・土日のどちらでもよい）を決めます。今後は、勉強会やイベントも開催できたらと考えていますが、まずは、気軽に集まれて近況報告や情報交換のできるプラットフォーム作りということで、毎回テーマを決めて自己紹介とともにそのテーマに関する考えを自由に発表してもらっています。

第 1 回目は 2012 年 11 月 19 日（金）に開催し、コンサル、水処理メーカー、水道事業者、水質分析会社などから 11 名の参加がありました。第 1 回目のテーマは、「2050 年の日本（水ビジネス、自分 etc）」ということで、我々が定年あるいは現役を引退している頃である 2050 年に自分、あるいは水業界、日本はどうなっているかについて意見を出し合いました。実は、このテーマは昨年 11 月に行われた水環境懇話会で中央大学の山村 寛先生がご講演の中で取り上げられた話題から拝借させていただきました。第 2 回目は 12 月 15 日（土）に、(株)ナガオカの為田 麻央さんに幹事をお願いし、「ペットボトルの水について」というテーマで開催しました。この回には Japan-YWP の広報委員の関西大学 山本 敦史先生にもご参加いただき、14 名の参加を頂きました。今後も東京に負けじと、ますます関西を盛り上げ、関西圏の YWP メンバーの増加につながればと思っております。

## J-YWP イベント報告 『第 2 回 Japan-YWP イブニングセミナー』

国立保健医療科学院

Japan YWP 戦略委員

岸田 直裕



**2**012 年 9 月 7 日（金）に東京大学 本郷キャンパスにて、第 2 回 Japan-YWP- イブニングセミナーが開催されました。当日は、水関連の研究者、事業者関係者、民間企業若手社員、学生など総勢 30 名の出席者があり、盛況なセミナーとなりました。

またワークショップ後には意見交換会も開催いたしました。23 名が参加し、こちらも盛況な会となりました。個人的には、同年代の様々な分野・立場の若手と情報共有できる貴重な機会であると考えておりますので、本番のイブニングセミナー同様、意見交換会（裏本番！？）にも力を入れていきたいと思っております。

YWP イブニングセミナーは、総会や全国水道研究発表会ジョイントワークショップ等の他のイベントと異なり、特定の時期に開催しておらず、定期の YWP イベントが少ない時期に開催しております。また、講演者は前回のセミナーの発表者からの紹介の形で（旧いとも形式！？）決定しております。次回の開催を楽しみにお待ちください。今後も YWP メンバーの交流を促進できるようなセミナー等を企画していきたいと考えておりますので、皆様のご協力をお願いいたします。

今回のイブニングセミナーでは 3 名の YWP メンバーより、下記の通り発表していただきました。

- ① 笹原 俊一（日本水道協会）  
「英国水道事業の変遷と水道民営化の評価～英国水道研修に参加して～」
- ② 金 京柱（メタウォーター株式会社）  
「現象、研究、そして商品」
- ③ 金井 佑樹（オルガノ株式会社）  
「国内窒素処理技術の動向」

Japan National Young Water Professionals Newsletter  
第 6 号

## J-YWP イベント報告 『水道技術国際シンポジウム若手専門家セッション』

株式会社 日水コン  
Japan YWP 戦略委員  
松原 康一

**第**9回水道技術国際シンポジウムは、水道技術研究センター主催により3年に1度開催される国際シンポジウムです。今回、Japan-YWPとして初めて、Special Sessionという形で若手の活動を紹介する機会をいただきました。本シンポジウムは、水道業界の重鎮の方々が一斉に集まって行われるシンポジウムで、我々のワークショップの会場にも大変広い場所をご提供していただき、予想外の大舞台という形になりました。内容としては、4名の産・官・学のYWPメンバーからご発表いただきました。㈱日水コンの安達さんからは、若手の水専門家として経験したことや感想などを、非常に率直な言葉で語っていただきました。横浜市の増野さんからは、ご自身も経験された横浜市によるベトナムでの事業についてご紹介いただきました。日水協の二宗さんからは、日水協としてのAWWAへの派遣について、現地での人との交流についてなどざっくばらんな話を交えてお話いただきました。中央大学の山村先生からは、中央大学としてスタートしたばかりの国際的な水環境人材の育成についての取り組みと葛藤の経験を共有していただきました。

当日は、毎回元気のでるスピーチをしていただけるIWA会長のGlen T Daigger氏や、我々若手を「ベイビーたち」と呼んで見守ってくださる、水道業界の錚々たる先生方にもご聴講いただくことができました。後日参加者からは、「このシンポジウムで唯一のフランクな発表でしたね。」というご感想をいただき望外の喜びでした。聴講者もベテランの方が多かったように思いますので、今回は、若手のニーズをとらえた会というよりは、上の世代へのアピールの場だったように思います。これからも若手のエネルギーを発信できる場のチャンスをどんどん取りこんで、若手としての発信力をアピールできれば嬉しいと思います。

## 手紙 ～拝啓若手の君へ～



## Do you know me?

北海道大学 特任教授・名誉教授  
渡辺 義公

**日**本のYWPが活発に活動していることに深く敬意を表します。IWAはYWP活動を積極的に支援する姿勢を示しており、特にアジア地区のYWPの活動に注目しています。同世代の官民学の「水の専門家」が団結して横の（広い）連携を強めることは非常に重要です。私の経験からも、同世代であることが人間関係をスムーズにする大きな要因であると思います。もう一つ重要なことは、世代を超えた「専門性」で繋がる縦の（深い）関係の構築です。IWAには約50のSpecialist Groupsがあります。それぞれが概ね2年に一回のGroup会議を開催しています。Group会議は縦の関係を構築する有効な場です。私が継続的に参加しているのは、「Particle Separation」と「Membrane Technology」のSpecialist Group会議です。残念ながらここでの論文発表数やcommittee memberとしての活動から見た日本人の存在感は決して高いとは言えません。他のSpecialist Groupsでも同じ状況ではないかと思えます。存在感を示すにはインパクトのある研究成果を発表することに尽きます。同時に、継続的に会議に参加し人的ネットワークを作ることも大事です。

これに関して、表題の「Do you know me?」の意味を考えてみましょう。この言葉は元NHKのスポーツアナウンサーの羽佐間正雄氏の著書で出会って感銘を受けました。彼が米国のプロゴルファーのジャック・ニクラウスにインタビューした時の最初の言葉だったのです。それまでに二人は直接会話したことはなかったようですが、羽佐間氏は米国でのメジャーなプロゴルフ大会のテレビ中継を何度もやっていたようです。多分、ニクラウスとは直接会話する機会は無かったにせよ、頻りにニクラウスの近くで取材していたのではないのでしょうか。その経験がありがたりの自己紹介ではなく、いきなり「Do you know me?」になったのです。勿論、ニクラウスは「Of course, I know you」と答えました。お互いに相手が「何者」かを知っているからこそ深い付き合いができるのです。特に、欧米の人々は属している組織や地位、年齢、性別よりは、お前は何をやっているのか、何ができるのかによって人を評価する傾向が強いと感じています。私も初対面なお互いの研究を知っていることで瞬時に親しくなれた経験を幾つか持っています。初対面の相手にいきなり「Do you know me?」は失礼極まりないことですが、これくらいの準備ができていて本当の付き合いができると思う意味でのたとえ話です。YWPメンバーの方々には、深い専門性で繋がる縦の関係の構築のために、IWAのSpecialist Groupsの活動にも積極的に参加して頂きたいと願っています。縦と横に広がることで、「Do you know me?」と挨拶できる本当の仲間ができるはずですよ。

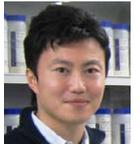
昭和 47 年 北海道大学大学院博士課程修了  
同年 宮崎大学工学部 助教授  
昭和 63 年 宮崎大学工学部教授  
平成 5 年 北海道大学工学部教授  
平成 20 年 北海道大学 環境ナノ・バイオ  
工学研究センター 特任教授  
中央大学研究開発機構 教授

Japan National Young Water Professionals Newsletter  
第 6 号

## 私の一日スケジュール



北海道大学・フランス海洋開発研究所  
三浦 尚之



**北**海道大学大学院工学研究院で博士研究員（日本学術振興会・特別研究員 PD）をしている三浦と申します。2012年7月より、フランス北西部・ナントにあるフランス海洋開発研究所（IFREMER）に派遣され、ノロウイルスやロタウイルスなどの胃腸炎ウイルスの水環境中における動態とそのリスク管理に関する研究を行っております。私が働いている IFREMER の微生物学研究室では、フランスの重要な海産物の一つであるカキに胃腸炎ウイルスが蓄積するメカニズムやカキからのウイルス回収・検出手法に関する研究、および国内の胃腸炎集団発生事例における病原微生物の検査を行っております。今回は、そんなフランスの研究所で働いている私のとある 1 日を次のタイムテーブルに従って紹介させていただきます。

**6:00 ~ 8:00**

生後 11 ヶ月の娘が起きた泣き声から 1 日がスタートです。妻が朝食の準備をしている間、娘を着替えさせ遊ばせます。私と娘、妻の順に朝食を終えた後、支度をして家を出ます。冬のこの時期は雨が多くトラムで通勤することが多いのですが、この日は晴れていたため自転車です。研究所は、ロワール川の支流エルドル川沿いに位置しており、自然が多く、冬でも自転車での通勤は気持ちがいいです。

**8:00 ~ 12:00**

研究室に着いて、まずはボスに一言挨拶します。ラボに行き培養細胞を観察し、それから自分のデスクに戻りメールをチェックします。9 時頃になると同僚たちが出勤して来るので、その前に実験をスタート（場所と装置を占領!?) するようにしています。毎朝 10 時にはコーヒブレイクという名のちょっとしたミーティングがあり、研究室のウイルス研究チーム全員（ボス、研究員 1 人、技術補佐員 3 人、ポストドク 2 人、博士課程学生 2 人、修士課程学生 1 人の計 10 人）が顔を合わせ、実験や分析に関する情報交換や世間話をします。およそ週に 1 度は、誰かがケーキやお菓子を買ってきて、コーヒーといっしょに食べる場所は、さすがガトー（gâteau）の国という感じです。

**12:00 ~ 13:00**

家に一旦戻り昼食です。研究所の近くに住んでいるメンバーは、家族といっしょに昼食をとります。

**13:00 ~ 17:15**

午後は、胃腸炎集団発生の原因と疑われるカキとムール貝の分析です。通常は技術補佐員が担当していますが、流行期は検体が多いので、特定の研究テーマを受け持っている研究員・ポストドクも手伝います。検体を解剖し、ウイルスが蓄積することが知られている消化器官のみを採取し、そこからウイルスを回収・検出するのですが、解剖が最も大変で時間のかかる作業になります。毎日何十検体も解剖していると、プライベートでカキやムール貝を食べたいと思わなくなります（食べるとおいしいのですが・・・）。

**17:15 ~ 20:30**

週 2 回のフランス語会話レッスンに行くために、普段より早めに職場を出ます。トラムで中心部に移動して、そこで 2 時間のレッスンです。今年に入ってから始めたのでまだまだですが、帰国する頃には少しは話せるようになっていたいです。

**20:30 ~ 23:00**

帰宅したら、まずはビールを一杯。フランス産のビールもありますが、ベルギービールが多く流通していてかつ好みの味なので、ベルギービールを飲んでみます。夕食を食べ、シャワーを浴びてからは、ワインを一杯。1 本 3 ヶ月前後でおいしいボルドーや地元のミュスカデが飲めるのは、フランスに赴任して良かったと思える瞬間の 1 つです。

日常生活において言語で困ることはありますが、家族との時間を大切にするフランスで、研究と子育てに没頭するという充実した日々を過ごしております。



ナントのシンボルの象



研究所の外観



部屋とカキと私

## Water Resources ~"みず"に関するおすすめ情報



## 『森が消えれば海も死ぬ 第2版 陸と海を結ぶ生態学』のご紹介

(松永勝彦：著 / 講談社)

大分工業高等専門学校

古川 隼士



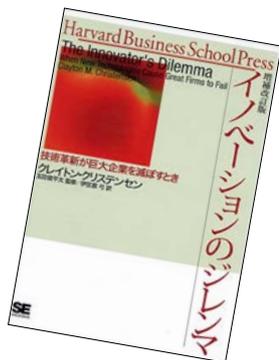
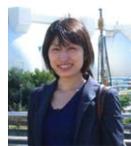
「漁師が山に木を植える」、このフレーズに当時大学生であった私は大きな衝撃を受けたことを鮮明に覚えています。1993年に出版された「森が消えれば海も死ぬ（初版）」は、水環境分野の研究に携わり始めた私に、生態系保全に加え水循環や物質循環の役割と重要性をより深く理解させてくれるきっかけとなった一冊です。本書の第2版は最新の事例や研究成果が大幅に加筆されています。内容は、沿岸域の生物生産における栄養塩や鉄等の必須元素が陸域から海域へと輸送される経路、いわゆる「森～川～海」のつながりの重要性について科学的根拠を踏まえて説明されています。さらに、この見解に基づいた地球環境再生のカギを握る森林・海における取り組みや、今後、我々が見直すべき姿勢や意識についても言及されています。森と海のように、一見すると別物として見られがちな要素が、実は強い「つながり」を有しているということを理解させてくれる内容です。本来あるべき地球環境の姿が、水・物質循環、さらには豊かな生態系の形成に如何に合理的に寄与しているかに関して、非常にわかりやすく記載されており、研究者・技術者はもちろんのこと一般の方にもお勧めしたい一冊です。

## 『イノベーションのジレンマ～技術革新が巨大企業を滅ぼすとき～』のご紹介

(クレイトン・クリステンセン：著, 玉田 俊平太：監修, 伊豆原 弓：訳 / 翔泳社)

国土交通省下水道部

西迫 里恵



技術革新はどの分野でも常に求められるものであり、それに成功した企業が市場を席巻し、成長を続けることができるというのは、誰もが認める理論だと思います。しかし、本書では、この技術革新には、「持続的イノベーション」と「破壊的イノベーション」の2種類があり、それぞれ、異なるアプローチが必要であることを述べています。破壊的イノベーションをもたらす破壊的技術とは、最初は新しい小さな市場のニーズを満たすものが、急激に成長し、主流市場の技術に取って代わるものであり、この破壊的技術に対応できるか否かが企業の成長の大きな分かれ目となるものだと示しています。そして、大企業においては、主要顧客のニーズに応え、従来の主流市場の価値基準を追求するという経営慣行が、破壊的技術の開発を妨げ、市場の獲得に失敗するという結論を明瞭な事例分析によって導き出しています。

2025年には100兆円規模にまで成長すると見込まれている水ビジネスですが、今後、激化していく競争環境の中で、企業が生き残っていくための多くの示唆を与えてくれる一冊だと思います。

## 『水の危機をどう救うか～環境工学が変える未来～』のご紹介

(丹保憲仁：著 / PHPサイエンスワールド新書)

株式会社東芝

柿沼 建至



2025年に世界人口の約半数が水不足に直面すると言われており、水資源の確保は喫緊の課題であると考えられています。

水資源の確保というと、海水淡水化や再生水利用が思い浮かびますが、本書ではそれらを時間や場所が限定的な技術と位置付け、世界人口が100億人超となる将来において「分散型水処理システム」が必要になると述べています。この分散型水処理システムこそが「水の危機をどう救うか」に対する著者の解であり我々若い技術者の道標になりうるものです。分散型水処理システムについては本書第4章で触れており、その他、日本や諸外国の水インフラの歴史について記載ありますので、過去・現在・未来の水インフラに興味のある方、満足のいく一冊と思います。

また、本書を読んでいると水処理に関わる人間の一人として、自らの無知さ加減に情けなくなり（私だけかもしれませんが）著者がいかに真剣に水インフラについて考えてきたか伝わってきます。

個人差はあると思いますが（笑）、水処理への熱意を高めたい方にも、ご一読をお勧めします。

## Japan-YWP 運営からのお知らせ

## 【重要】ML 登録アドレスの整理について

所属変更などに伴い、**ML が不達となる会員**が主に学生や自治体関係者に見られることから、ML 登録アドレスの整理を以下の通りに行います。

- 現時点で不達のアドレスは ML から外す。
- 年度明けに再度メールの配信状況を確認し、不達アドレスを ML から外す。
- 35 歳以上の ML 不達者は退会扱いとする。
- 35 歳未満の ML 不達者は会員名簿に残す。

\*所属や連絡先が変更になった場合は、Japan-YWP 運営委員 総務担当 (東北大学 真砂) までその旨連絡ください。(japanypw@gmail.com)

## 入会方法と問い合わせ先

## ■入会方法

随時、会員募集中です。会員要件は、大学・研究機関、官公庁、上水道・下水道事業体、民間企業などに所属する水関連の若手・学生 (原則 35 歳以下) とし、専門内容や IWA 会員であることの有無は問いません、また、年会費等は不要です。入会希望の方は、①所属、②氏名、③生年月日、④ E-mail アドレス、⑤専門分野を明記の上、以下のアドレスまでお気軽にお申込みください。

宛先 japanypw@gmail.com (担当: 真砂佳史, 二宗史憲)

## ■お問合せ

春日郁朗助教 (代表, 東京大学大学院)

kasuga@env.t.u-tokyo.ac.jp

佐藤久准教授 (副代表, 北海道大学大学院)

sato@eng.hokudai.ac.jp



入会・退会・変更の手続き欄が見つげにくいという指摘をいただき、右のメニュー欄へ移動しました。より分かりやすく、使いやすいホームページを目指し、皆様のご意見を反映させたページ作りに取り組んでいます。

## 今後の予定 (YWP 活動予定)

## (1) 第 2 回 Japan-YWP 国際シンポジウム

2013 年 6 月 15 日 (土) に東京農工大学小金井キャンパスで WET2013 YWP セッションを開催致します。参加登録、スケジュール他は会議ホームページを参照してください。

- 日程: 2013 年 6 月 15 日 (土)
- 場所: 東京農工大学小金井キャンパス
- 使用言語: 英語

<https://www.jswe.or.jp/extra/wet2013/index.html>

## (2) その他、開催予定の活動

- 1: 第 2 回下水道の産官学若手ワークショップ
- 2: 第 4 回 Japan-YWP & 全国水道研究発表会ジョイントワークショップ
- 3: その他各種セミナー、総会など (時期未定)

詳細が決まりましたら、適宜メーリングリストやホームページでお知らせいたします。

## 編集後記

桜の開花宣言が発表されました。

この一年、Japan-YWP では APYWP や各種セミナー等多くのイベントが行われ、たくさんの方と知り合い、交流を深めることが出来ました。イベントの運営にご協力していただいた皆様、また参加していただいた皆様には心より感謝申し上げます。

今回のニュースレターでは APYWP を特集として取り上げました。残念ながら会議に参加できなかった皆様にも APYWP の雰囲気や体験できるように、会議の写真ができる限り掲載し、会議当日の様子を伝えられるように編集しました。個人的な話ですが、懇親会が行われた大江戸温泉物語で良い出会いがありました。APYWP 懇親会の後に温泉に入って帰ろう! と思って露天風呂に行くと、シンガポールの大先生と遭遇し、のぼせるまで研究のマニアックな話やダイエットの話で盛り上がりました。国は違えど、悩みは同じようです。

また、APWYP では Japan-YWP のロゴマークが発表されました。すでに、ニュースレターの右上ですっかりなじんでいるように感じます。投票していただいた皆様、ご協力いただきありがとうございました。

Japan-YWP では 2014 年度も引き続き、様々なイベントやセミナーを予定しております。これらのイベントを通じて、より多くの方々と交流を図っていけたらと考えております。今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。最後になりましたが、原稿や写真をお寄せいただきました皆様、年度末の大変お忙しい中ご協力頂き、誠にありがとうございました。心よりお礼申し上げます。

(Japan-YWP 広報委員)

## Japan National Young Water Professionals Newsletter Vol. 6

発行: 2013 年 3 月 17 日

発行: Japan National Young Water Professionals (代表 春日 郁朗)

編集: Japan National Young Water Professionals 広報委員

ホームページ: <http://www.japan-ywp.net/>